

平成6年度

地域畜産状況レポートNo.2

社団法人 熊本県畜産会

夢は自己完結型大規模複合経営

菊池郡合志町豊岡
大久保 俊和 氏

○ 中世の山城跡と竹の町合志町は熊本市北東16kmの距離。

史跡と竹の町にふさわしく、世界の竹の30数種類が集められている。

世帯数6,000戸。人口21,000人。

地形は、阿蘇外輪山に連なる火山灰洪積台地で、標高50～110mのゆるい傾斜地であり、土質は、黒色火山灰土が、その大部分を占めている。

合志町は、酪農・企業養鶏等、本県を代表する畜産の町でもあるが、そのなかで将来酪農を主体とする大規模複合経営をめざす**大久保牧場**がある。

働けど、働けど収入のないのが現実

俊和氏は、昭和46年、菊池農業高校を卒業した。

3年間で学んだことは、「農業がいかにもうからないか」ということだった。

当然、大学に進学したかったが、家には膨大な借入金もあり、とうとうあきらめざるをえなかった。卒業にあたって恩師は「火山灰の黒ほくで手を汚さなくてよか、地下足袋もはかんでよか百姓ばせ」と励まされた。

当地区は、高台の畑地のため、水田は構造改善事業による整地と水路の開発によって造成されてきた。改設水田とちがって真夏の暑い日に手と足を道具としての除草作業と多くの労力を要した。

秋に、米160俵ほど出荷しても殆ど収入はなく、働けど働けど収入のないのが現実であった。

酪農は現金収入が魅力

酪農は現金収入がある。酪農は重労働の大部分を機械化できる等、大きな魅力がある。

お金はなかったが、専業酪農をめざした。ただ同然の筭の皮を利用し、乳牛も9頭から25頭にふやすこともできた。

昭和51年、総合施設資金2,569万円を借入し、40頭規模の畜舎を建設。しかし、乳牛を導入しなかったため乳量はふえないまま、昭和54年、第1回の生産調整をむかえてしまった。

きわめて厳しい経営に直面したが、生まれる子牛はすべて育成し、搾乳素牛・肉用として販売、なんとか経営を維持することができた。



コンプリート給与状況

5カ年計画の実現

昭和55年、昭和60年をめどに5カ年計画をたてる。

当年度の目標は、物価上昇・乳価の見直し等を試算し、販売乳量は230,000kg。

もし、このまま5年後も生乳の生産調整が続くとすれば、その不足ぶんを個体販売益でカバーすることにし、規模は100頭に挑戦。

この計画も昭和50年、熊本商科大学に進学してから、在学中に「データの蓄積はコンピューターしかない」とおっしゃった先生の言葉が忘れられず150万円でパソコン一式を買う。

寝食を忘れてとりくんだ時代もあったが、いまでは7台目を使っている。

瞬時に出力されるデータは経営戦略の大きな柱になっている。

妻は看護婦10年キャリアー

結婚は昭和61年6月。

結婚式の翌日は、黒毛和牛の第一回採卵日。

あわただしい結婚の夜明でもあった。後に、その採卵で11個の受精卵がとれ、そのうち10個が受胎、分娩するなど日本一の記録として、全国的なニュースとなった。

妻みどりさんは、熊本市立病院の看護婦として10年勤務。内科、外科を担当し、充実した看護婦生活であった。

俊和氏との出逢いは、大学時代、ともに在学。お互い自治会の活動をとおして知り合う。

農家に嫁げば、とてもこのような充実感は経験できないものと思っていたとか。翌年、新たに肥育牛舎30~40頭規模を建設。従来雌だけを残していた子牛も、雄・雌[♀]両方[♂]を残すことにし、頭数は一挙にふえた。

平成3年には、外牛マリグレーも40頭導入肥育し平均400,000円で販売。これが貢献し、当年は総頭数140頭。総売上6,000万円を達成。

妻みどりさんの主な仕事は、哺育・育成である。

生まれる牛は殆ど黒牛和牛のETであるが看護婦時代の衛生管理をいかし、きわめて順調な実務である。

子牛は、生後1カ月すると安定期にはいるが、それまでは50%が下痢をする。子牛の哺育は、下痢対策といえる。それでも一貫肥育で販売すればA3・A4で販売できるし、子牛で販売しても平均250,000円は維持できる。

やっぱり苦労したからこそ、この価格で売れる。

「牛」に感謝するときでもある。



大久保夫妻

1億3千万円でフリーストール完成

経営の最終目標は、酪農と肥育・野菜の大規模複合経営。

フリーストール(100頭規模)の導入にあたっては、昭和51年に借り入れた総合施設資金償還のめどもつき、過去の実績と将来の収支をコンピューターで何度もシミュレーションをし、堅実な見通しに、なお20%の危険率をみこみとりくむ。

堆肥の処理施設は「平成5年度畜産活性化総合対策事業」の共同施設である。

総事業費1億3千万円。補助金4,000万円。借入金は総合資金4,500万円、近代化資金1,500万円、それに改良資金2,000万円。

乳牛は、37頭(経産牛12頭・子牛・未經産牛25頭)北海道からの導入である。完成は平成6年3月29日。

つなぎから、フリーストールの移行にあたっては、フロアの仕上げを徹底して削ったこともあり、8頭の廃用があったものの、足が悪くなつての廃用はなかった。販売乳量は昨年の370,000kgから500,000kgを予定。



新設フリーストール全景

自己完結型大規模複合経営

俊和氏は昭和56年頃から、酪農の大規模拡大にともない、いずれは、定年退職者等の雇用を考えておられたが、いまのところ、妻みどりさんが看護婦時代、精神科の職親制度の経験があったこともあり、病状の軽い人を2人雇っておられる。

交通費別途で時給500円である。将来の夢は一般の人を雇い搾乳牛300頭・ET子牛の一貫肥育・それに、ゴボウ、人参、ハクサイ、ジャガイモ等野菜をとり入れた大規模複合経営である。なぜ、**野菜を含め、複合経営をするか**といえは、堆肥の処理が非常に合理的であるから。

完熟堆肥は、民家周辺、生堆肥は公害のないところで利用することができる。

野菜は種蒔等に大変であるが、とにかく収支はトントンでもよいから膨大な堆肥の処理を完全にし、合理的な**自己完結型大規模複合経営**をめざす。

平成6年の実績は、総頭数200頭。

売上は、ふたたび6,000万円を越える。今後は、ETの肥育牛がつぎつぎと販売できるから、たのしみである。

経営は、技術も必要であるが、企画、資金、環境等総合的なとりくみもお必要である。